

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 6 月 26 日現在

機関番号：24201

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K02487

研究課題名(和文) 事態解釈とその言語形式に関する類型論的研究 再帰的受益者主語構文を中心に

研究課題名(英文) A typological study on construal of event structures and its linguistic manifestations: with special reference to reflexive beneficiary-subject constructions

研究代表者

小熊 猛 (KOGUMA, TAKESHI)

滋賀県立大学・人間文化学部・教授

研究者番号：60311015

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：「再帰的受益ないしは被害」の事態把握が異なる言語においては異なる言語形式で実現され得ることを示した。行為に伴う経験・局面へ注意・関心を移す事態解釈は英語ではHave a V構文が、日本語ではVテミル構文が担う。再帰的自叙は、日本語、チベット語ラサ方言、モンゴル語、英語ではそれぞれ異なる形式で標示される。日韓語の空間指示詞の選択は、いずれも三項指示詞体系であるにも関わらず、ときに異なる空間の間仕切り方を示す。以上の観察を通して、話者と聴者を一括りに扱う発話場面のモデルは十分ではないことを指摘し、日韓英語の振る舞いの異同を正しく捉えるには両者を明確に区別するモデルが不可欠であることを示した。

研究成果の概要(英文)：This study addressed the event conception characterizable as a reflexive benefactive/adversity. We showed that languages can have different morpho-syntactic manifestations of a comparable conception of reflexive benefactive/malefactive event or reflexive speech event: (i) different strategies employed for action-phase-defocusing (e.g., the English have a V and the Japanese V-temiru construction); (ii) distinct grammatical devices for self-recounting speaker/addressee among Japanese, Tibetan, Mongolian and English; (iii) different choices of demonstratives in Japanese and Korean, both of which have a tripartite system but exhibit contrasting ways of partitioning the demonstrative space. We finally found it necessary to revise the widely-accepted speech-event model which does not distinguish speaker and addressee by proposing a model differentiating those two speech act participants, which could account for a wide range of linguistic behaviors chiefly in English, Japanese, and Korean.

研究分野：認知言語学

キーワード：再帰性 受益 被害 発話場面の概念化 構文 事態解釈 自叙

## 1. 研究開始当初の背景

対照言語研究および類型論的研究では、「受動構文の対照比較研究」のように、しばしば分析対象とする複数の言語の特定の言語構造ないしは対応構文を対照させるアプローチが主流であると言える。ところが、類似した事態把握が、異なる言語では異なる構文形式によって担われると見做すべき通言語的事例が数多く観察されることが昨今の研究で次第に明らかになって来ている。

例えば、*Mary had a walk in the garden.* に例示されるような英語の Have a V-stem のようなタイプの構文は、「気晴らし」、「評価・査定」、「実感」といった行為主体の〈心理的受益〉に焦点を当てる事態把握を反映するものであり、当該の言語形式(構文)そのものがその意味的貢献を担っている。

本研究は、このタイプの構文は経験者主語構文とも質的に異なる独立した構文であるとする先行研究(Wierzbicka (1988))を踏まえ、日本語の「V テミル」試行構文がこの構文と密接な機能的類似性を示すことに着目し、その機能的、意味的、概念的異同を明らかにすることを出発点とした。そして、これら別々の言語の違いに異なるタイプの構文には、形態統語的な差異を超えて、「再起的受益ならびに被害」として一般化することが可能な共通性が見出せるのではないかという着想を得るに至った。

## 2. 研究の目的

本研究は、以下に示した3点を主な研究目的として掲げた。

- (1)「再起的受益ならびに被害」タイプの事態把握が人間の生活に根差した一群の行動形態を纏め上げる概念範疇であり、他の言語においても一定の語用論的な機能単位を構成していること一端を明らかにする。
- (2)「再帰的受益および被害」という事態把握を軸にした類型論的認知語用論研究を試みる。
- (3)「再起性」(reflexive)、および「構文」に着目し、「発話場面の概念化」(speech-event conception)という観点に基いて、事態解釈とそれを反映する言語形式の研究を通言語的に進める。

## 3. 研究の方法

本研究は、以下に示す三つを主な研究方法として採用した。

- (1)文献調査
- (2)対象言語の母語話者に対する聴き取り調査(英語、韓国語、チベット語ラサ方言、モンゴル語ほか)
- (3)上記(1)(2)で得られた調査結果に基づき、機能的・認知的・語用論的分析を進

め、その結果を国内外の学会等にて発表し、当該言語に造形が深い専門家や関連する枠組みによる分析に明るい研究者等からフィードバックを得ることで、本研究課題従事者による記述、分析、及び一般化の妥当性を検証する。

## 4. 研究成果

本研究課題では、以下の(1)から(3)に示す主に4点の成果を得ると共に、(4)に纏めたような更なる研究への展望を得ることが出来た。

(1)再起的受益ならびに被害という観点

①Have a V-stem 構文(e.g., *Mary had a walk in the garden.*)は、事態の〈行為〉局面から〈行為に伴う経験〉局面へと意識・関心を移す (conceptual focus shift) 構文であるとし、この構文は〈完結性〉(telicity)および〈遂行目的〉(purpose)を明示する要素とは共起しないとされる(cf. Wierzbicka 1988)が、British National Corpus のような大規模なコーパスを検索すると、実際には〈完結性〉(telic)および〈遂行目的〉(purpose)を示す要素を伴う事例が存在することが明らかになった。この成果は雑誌論文⑤として纏め、広く一般に利用可能な形で公にした。

②英語の Have a V-stem 構文が表す「気晴らし」「癒やし」のような〈心理的な再帰的受益〉を言語化し得る機能的類似構文として、日本語には「V テミル」構文のタイプが観察されることを指摘し、更に、アイヌ語、フランス語にも「V テミル」に対応ないしは関連すると思われる表現(e.g., *Voyons voir.* (どれどれ、何だっ))が観察されることを指摘した。(雑誌論文⑤)。

この「V テミル」タイプの構文は知覚動詞「見る」をルーツとする複合述語と分析するのが妥当であるが、本来的には敬語的形式の命令形であった「ごらん」が「見る」の位置に用いられる際に、「気晴らし」「癒やし」のような〈心理的な再帰的受益〉がもっとも典型的に現れることから、日本語においては話し手と聞き手の相互作用という意味的な側面が強く関わっていることが明らかになって来た。

③更に、本研究の根幹をなす理論的分析として、再起的で内省的(reflectional)な構文が依拠する発話場面の語用論的要素を捉え、概念化の記述を試み、当該の構文とその類似表現が「再起的受益ならびに被害」という概念化を具現化する代表的な言語形式であることを指摘した。*have a walk* という表現が帯びる「気晴らし」(再帰的受益者主語構文)の事態解釈が日本語で「V テミル」として言語化され得るとする観察に端を発し、「V and see」という言語

形式（複合述語）が日本語、韓国語、アイヌ語でどのような意味を担い得るかについて比較対照し、概念化の（脱）焦点化の差異として統一的説明が可能なことを示した。（国際会議発表②および雑誌論文③）

こうした知見から、本研究が対象とする「再起的受益ならびに被害」は、単に話者による事態把握という観点のみから記述・分析され得るものではなく、話し手と聞き手の両方を取り込んだ発話事象までも包括する概念化（発話場面の概念化）を前提として記述・分析されなければならないことが次第に認識されるに至る。こうした認識は、この後に行った分析を大きく方向付けることに繋がって行く。

## (2) 発話場面の概念化という観点

① 事態解釈と言語形式という観点の研究成果として、ラサおよびアムド・チベット語の陳述・疑問文環境に観察される一見不可解なコピーラの分布パターンが、再帰的自叙（self-recounting）に根ざすアンカーリング話者（Anchoring speaker）として捉えられることを示し、日本語の再帰代名詞「自分」の指示対象、更には副詞的機能を担う英語の懸垂分詞の一部の振る舞いも同様にアンカーリング話者に起因すると論じた。

「再帰的自叙」という出来事概念化は、再帰性という事態解釈上の特性から、「再起的受益ならびに被害」という出来事概念化と密接に関わることが改めて浮き彫りとなり、発話者と発話対象、行為者と受益者・被害者が一致するかしないかの違いが、話し手と聞き手の違いと同様か、もしくはそれ以上に不可欠な要素となる事象が存在することを認めるに至った。

本研究は、上記の言語現象が「話者」と「聴者」を一括りに概念化者として扱う認知モデル（ステージモデル）では捉えられないことを明確に示し、今後の研究課題を提示した。（国際会議発表④および雑誌論文④）

② 日韓語はともに三項指示詞体系ではあるものの、劇場等におけるステージ上の対象指示において、両言語が異なる指示詞選択を行う言語事実に着目し、従来の舞台依拠モデルではこの現象を十分に捉えきれないことを指摘し、「指示的概念空間の間仕切り」という観点からこの相違を捉え直して、より妥当な説明が可能となる発話場面の概念化モデルを提案した。

この研究は、認知文法等では一括りに扱われる嫌いのある概念化者を「話者」と「聴者」とに分けて記述する必要性を指摘するとともに、日本語、韓国語がそれぞれ〈並び立つ〉（side-by-side）タイプ、〈見つめ合う〉（face-to-face）タイプの発話場面構図を基本とすると一般化できるという可能性を明確に示した。

（国際会議発表③および雑誌論文③）

## (3) 事態解釈と言語形式という観点

上記2点の成果から「再起的受益ならびに被害」は、単に話者による事態把握という観点のみならず、話し手と聞き手の両方を取り込んだ「発話場面の概念化」を前提として記述・分析されなければならないことが強く認識されるに至ったが、依然として、話者と聴者をも包含する「発話場面の概念化」を必ずしも前提とせずに、対象となる事態解釈にのみ言及することで捉え得る「再起的受益ならびに被害」も見出されるということが確認された。

従属節にのみ観察される二格（与格）には、主節で表現される出来事の動作主が自らを潜在的な受益者もしくは被害者として発想し、その利益ないしは被害をコントロールしようとする出来事概念化を前提とする表現形式に用いられることに着目し、ブレンディング理論を援用してこれに通言語的観点から発展的分析を試みた。この従属節のみに現れる二格については管見の限り指摘されておらず、当該の二格の用法は動詞の意味構造のみでは説明できないことを示した。

（国際会議発表①⑤および雑誌論文①）

## (4) 今後の研究への展望

「再帰的受益および被害」という事態把握を軸にした類型論的認知語用論研究の有用性を示すとともに、「発話場面の概念化」（speech-event conception）に依拠し研究の重要性を改めて示した本研究は、後の研究課題として科学研究費補助金申請へと繋がる「ダイクシスの動的側面」および「発話事象概念」に迫る認知類型論研究の着想に結びついて行く。

## 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 5 件）

① Koguma, Takeshi & Katsunobu Izutsu (to appear) Case-marking idiosyncrasy in subordination: the Japanese dative *ni* and beyond, *Investigationes Linguisticae*, vol. 37. 査読有

※本来 2017 年発行であったが発行先の事情により 2018 年 7 月発行となる予定

② Izutsu, Katsunobu & Takeshi Koguma (to appear) Speech-event conceptions behind discourse-pragmatic characteristics of the construction 'do and see' in East Asian languages. *Investigationes Linguisticae*, vol. 37. 査読有

※本来 2017 年発行であったが発行先の事情により 2018 年 7 月発行となる予定

- ③ Izutsu, Katsunobu & Takeshi Koguma (to appear) Partitioning in demonstrative mapping: A reconsideration on stage-based models of speech event conception. *Journal of Hokkaido University of Education*, 69 (1). 査読無
- ④ Koguma, Takeshi & Katsunobu Izutsu. (2017) Anchoring Speaker: A Conceptual Account of a Copula Distinction in Tibetan with Related Phenomena in Japanese. *Human Cultures (Bulletin of School of Human Cultures)*, vol.42, 2-7. 査読無  
[http://www.usp.ac.jp/user/filer\\_public/3a/71/3a71f294-9ef7-4a66-bbfa-0455684458c8/bunka\\_42\\_2017.pdf](http://www.usp.ac.jp/user/filer_public/3a/71/3a71f294-9ef7-4a66-bbfa-0455684458c8/bunka_42_2017.pdf)
- ⑤ 小熊猫 (2015) 事態把握を軸にした類型論の予備的考察 — 再帰的受益者主語構文を中心に — 『人間文化』 (滋賀県立大学人間文化学部研究報告) 39 号. 43-47. 査読無  
[http://www.usp.ac.jp/user/filer\\_public/5b/04/5b0458c2-2e68-4070-bbab-7771519be6a8/bunka\\_39\\_2015.pdf](http://www.usp.ac.jp/user/filer_public/5b/04/5b0458c2-2e68-4070-bbab-7771519be6a8/bunka_39_2015.pdf)

[学会発表] (計 6 件)

- ① Koguma, Takeshi & Katsunobu Izutsu  
 Case-marking idiosyncrasy in subordination: the Japanese dative *ni* and beyond  
 International Conference on Asian Linguistics (ICAL2016)  
 2016 年 12 月 15 日  
 Nguyen Tat Thanh University, Ho Chi Minh City (Vietnam)
- ② Izutsu, Katsunobu & Takeshi Koguma  
 ‘Do and see/hear’: Speech-event conceptions behind the discourse-pragmatic characteristics of the converb construction in Japanese, Korean, and Ainu  
 International Conference on Asian Linguistics (ICAL 2016)  
 2016 年 12 月 15 日  
 Nguyen Tat Thanh University, Ho Chi Minh City (Vietnam)
- ③ Izutsu, Katsunobu & Takeshi Koguma  
 Different partitioning in the stage-based model of speech event: With contrastive reference to deictic expressions for topic entities in Japanese and Korean conversations  
 High Desert Linguistics Society Conference (HDLS 2016)  
 2016 年 11 月 13 日  
 University of New Mexico in Albuquerque, New Mexico (US)

- ④ Koguma, Takeshi & Katsunobu Izutsu  
 Two Types of Anchoring Speakers:  
 A Conceptual Account of a Copula Distinction in Tibetan  
 10th International Conference of the Spanish Cognitive Linguistics (AELCO2016)  
 2016 年 10 月 27 日  
 Universidad de Alcalá, Alcalá de Henares, Madrid (Spain)
- ⑤ Koguma, Takeshi & Katsunobu Izutsu  
 A Blending Approach to Constructionally-motivated Dative *ni* in Japanese  
 International Workshop on Cognitive Grammar and Usage-Based Linguistics  
 2016 年 6 月 19 日  
 大阪大学 (豊中キャンパス)
- ⑥ Izutsu, Katsunobu & Takeshi Koguma  
 Usage-based motivation for and against blending: causative/passive and benefactive/malefactive interactions in Japanese  
 International Workshop on Cognitive Grammar and Usage-Based Linguistics  
 2016 年 6 月 19 日  
 大阪大学 (豊中キャンパス)

[図書] (計 0 件)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

小熊猫 (KOGUMA Takeshi)  
 滋賀県立大学・人間文化学部・  
 国際コミュニケーション学科・教授  
 研究者番号: 60311015

(2) 研究分担者

田村 幸誠 (TAMURA Yukishige)  
 大阪大学・言語文化研究科 (研究院)・  
 准教授  
 研究者番号: 30397517

金 知賢 (KIM Jihyun)  
 宮崎大学・語学教育センター・准教授  
 研究者番号: 40612388

(3) 連携研究者

井筒 勝信 (IZUTSU Katsunobu)  
 北海道教育大学・教育学部・准教授  
 研究者番号: 70322865